

# 人馬ともに生き抜いた 十勝と馬の百年物語

明治の幕開けとともに始まった十勝の開拓。以来、機械化の波が押し寄せるまでの約100年の間、人々の暮らしの中にはいつも馬の姿がありました。農耕に林業に、運搬にとあらゆる場面で活躍した馬たち。ばんえい競馬に受け継がれる馬産地・十勝の馬文化の歩みを写真とともに辿ります。

取材協力／NPO法人とかち馬文化を支える会



昭和30年、人や車に混ざって踏切を渡る馬車。現在の西5条南10丁目付近に当たる西5条踏切にて。  
(写真／狂田喜與志)

# 開拓時代を支えた馬たち

北海道に、本州から馬が入ってきたのは江戸中期。明治期になると馬は開拓の担い手となり、馬産地・十勝の礎が築かれます。

## 北海道和種「ドサンコ」の誕生

### 厳寒に耐えた馬たち

ばんえい競馬の故郷であり国内有数の馬産地として知られる北海道ですが、意外なことに、この地にもともと馬はいませんでした。アイヌ語でも馬は「ウンマ」と呼ばれ、アイヌ固有の言葉ではなく和人から伝えられたものであることが分かります。

北海道と馬との関わりは江戸時代中期。「蝦夷地」と呼ばれていたこの地に、松前藩の藩士や本州からの出稼ぎ人、商人などが南部馬を連れてきたのが始まりです。冬が近づき、本州に帰る人々は馬を野に放ちました。すると驚いたことに、馬たちは極寒と粗食に耐え抜き、生き延びて春を迎えたのです。

北海道の厳しい自然に適応し

た馬たちは、半野生状態で飼育さ

れるようになりました。夏から秋にかけては自由に野の草をはみ、冬になって原野が雪に閉ざされると、掘り起こしたミヤコザサや浜辺に打ち寄せられた海藻などを拾い食いして命をつなぎます。松前藩の藩士たちは、この時を待って馬を捕らえ、秋の間に用意した干草を与えて人に馴らしたそうです。

こうして自然繁殖した馬が、北海道和種馬「ドサンコ」の始まりでした。東北生まれの南部馬は、今では絶滅してしまいましたが、古来、名馬と謳われ、大きく立派な体格が特徴でした。それに対し、ドサンコは北海道の自然環境に合わせ、体格こそ大きくなかったものの、丈夫で頑健な体質を得たのです。

### 十勝沿岸部に馬来たる

江戸幕府による蝦夷地進出は、道南の渡島地方から次第に沿岸部全域へと広がっていきました。十勝に初めて馬がもたらされたのは寛永十一年（一七九九年）のこと。東蝦夷が幕府直轄となり、交通と物資輸送のため、六十頭ほどの南部馬が沿岸部の広尾と大津に配備されました。これらの馬が自然繁殖する一方、交通網の拡充に伴って新たに導入された馬もあり、その数は安政五年（一八五八年）には二一五頭にも達したと言われています。

やがて本格的な開拓時代が始まります。明治二年（一八六九年）、蝦夷地は北海道と名を改め、現在の十勝管内域に当たる地に十勝国が創設されました。それとともに配備されていた馬たちは、本州からの定住者やアイヌの人々に安価で払い下げられました。十勝において民間人が馬を持つようになったのは、これが最初とされています。

### 西洋から伝わった馬耕

北海道の原野開拓は、想像を絶する困難を伴いました。木を切り倒しても地中に深く張った太い根

が残り、土をならすのも容易ではありません。この根を抜く作業「抜根」を担ったのが、頑強なドサンコたちでした。体高が低く、がっしりとしたドサンコは、背に荷物をくくりつけて運ぶ「駄載」にも優れていました。開墾が軌道に乗ると、馬たちの仕事はさらに増えていきます。

明治政府は、北海道に大規模農業を根付かせるべく外国人指導者を招き、本州に先駆けて西洋式の農具を導入しました。プラウ（すき）、ハロー（碎土機）、カルチベータ（中耕除草機）といった最新の農機具をひくのは馬たちの役目です。

した。開拓民は外国人指導者から、馬を操る技術も学びました。ひき馬を自在に操るこの技こそが、ばんえい競馬に引き継がれていったのです。



馬の資料館に展示されているプラウ。実物大の模型で当時の馬を使った農作業の様子を知ることができる。



十勝の農村部で日常的に見られた農耕馬のいる光景。大正16年。（写真／馬の資料館）

## この物語の舞台 十勝マップ



### 十勝と馬の略年表

寛永11年 (1799年)	現在の広尾と大津に南部馬が配備される。
明治2年 (1869年)	十勝国創設。配備された馬が民間に払い下げられる。
明治16年 (1883年)	依田勉三率いる「晩成社」が現在の帯広に入植。
明治19年 (1886年)	晩成社が本格的に馬耕を始める。
明治39年 (1906年)	第一次馬政計画始まる。
明治43年 (1910年)	仙美里地区に軍馬補充部釧路支部足寄太出張所開設。十勝種馬牧場開設。フランスからイレネーを導入。
大正14年 (1925年)	仙美里の軍馬補充部、釧路支部から分離して十勝支部に。
昭和5年 (1930年)	十勝公会堂前にイレネーの初代銅像建立。
昭和20年 (1945年)	北海道空襲。第二次世界大戦終結。
昭和30年 (1955年)	十勝の馬の総数約65,000頭に。
昭和35年 (1960年)	この頃からトラクターが普及し、馬は減少。
昭和39年 (1964年)	帯広競馬場にイレネーの銅像再建。

馬耕に励んだ鈴木銃太郎

十勝の開拓は官主導の屯田兵ではなく、本州から渡った民間の開拓移民によって進められました。現在の静岡県松崎町で依田勉三、鈴木銃太郎、渡辺勝らが「晩成社」を結成。明治十六年（一八八三年）、一行二十七名が下帯広村（当時）に入植します。これが、十勝で最初に町となる「帯広」の始まりでした。

晩成社の人々が開墾を始めた土地は巨木が多く、長らく手起こし作業が続きました。しかし耕地が広がるにつれ、畜力による耕作の試みが始まります。明治十八年九月、晩成社に初めて馬六頭がやってきました。鈴木銃太郎の日記によると、早速、馬たちに逃げられてしまい、馬集めの際に落馬してあばら骨を痛めたとあります。しかし、じきに銃太郎は見事に馬を乗りこなすようになりました。晩成社は馬たちの共同牧場をつくり、明治十九年、本格的な馬耕を始めます。中でも最も熱心に馬

耕に取り組んだのが銃太郎でした。晩成社と別れてシブサラ（現・芽室町西土狩）へ移住して以降、本格的な馬耕を開始。二頭びき、三頭びきプラウ、カルチベータなどを利用した耕作に励み、新規の開拓民への技術指導にも当たりました。

明治三十年代になると銃太郎は美生にて本格的な馬の牧場を営み、種馬の導入と品種改良にも励みました。この牧場は上伏古の息子に受け継がれ、その後、大型の農耕馬を生み出すに至りました。

渡辺勝、英国青年に馬を貸す

晩成社のもう一人の中心人物、渡辺勝と馬について、こんな面白い話も伝わっています。明治二十三年八月、勝の住む草葺きの掘っ立て小屋に、北海道旅行中のイギリス人青年ランダーが訪ねて来ました。英語の堪能な渡辺夫婦の歓待を受け、ランダーは二晩を楽しく過ごし、一枚の油絵を残して大津へと向かいました。この時

ランダーは、二頭の馬を勝から借り受けています。

大津に到着したランダーは、宿泊した宿の主人に勝の馬を託します。ところがこの主人、いささか評判の悪い人物で馬はいっこうに戻りません。当時は馬一頭が三十円の時代、馬二頭といえば、ひと財産です。

ランダーは勝に幾度も手紙を書

き、あのような人物に馬を預けてしまった自らの軽率を詫言います。

しかし勝はランダーを責めることなく、親愛の情に溢れた返事を書くのでした。結局、宿の主人が馬を返すことはありませんでしたが、馬は自力で、勝ではなくその前の飼い主の元へ戻ったという話です。

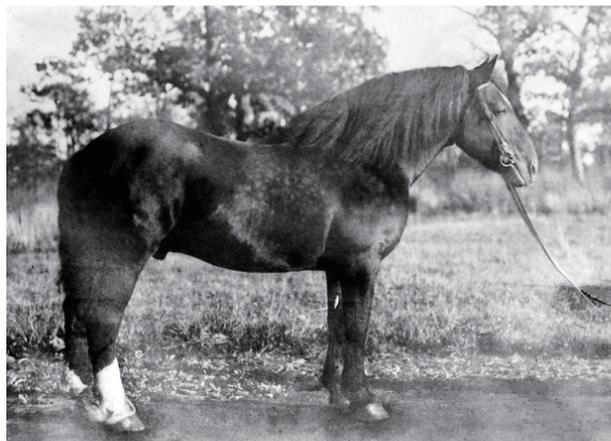


上伏古牧場で種牡馬にまたがる鈴木銃太郎の4男・信夫氏。(田所武編著『鈴木銃太郎日記』より転載)

ばん馬の父・イレネー

「重種馬の十勝」の幕開け

北海道で農耕が軌道に乗り始めると、小柄なドサンコよりも、荷をひく力に優れた大きな馬が求められるようになりました。政府の奨励によって海外からトロッター種、ペルシユロン種などが輸入され、ドサンコとの交配によって大型馬が誕生するようになります。こうした交配馬は農用トロッ



フランスからやってきたイレネー。(写真/ (独) 家畜改良センター十勝牧場)

ター、略して「農トロ」と呼ばれ、ドサンコに代わる農耕馬として広く使われるようになりました。明治四十三年、馬の改良と繁殖を目的として、現在の音更町駒場に十勝種馬牧場（現・独立行政法人家畜改良センター十勝牧場）が開設され、フランスから三頭のペルシユロンがもたらされます。そのうちの二頭が、その後の十勝の馬産に大きく貢献することになる「イレネー」でした。

体重一九七貫（約七四〇キロ）、現在のばん馬に比べると小柄な方ですが、当時はあまりの大きさに、果たして日本の馬に種つけできるものかと心配する声が上がったほどでした。イレネーは十八年の間に一〇七四頭の牝馬に種つけし、五七九頭の産駒※を残した上、その直系の子孫は、さらに多くの優良馬を生み出しました。このイレネーの功績が、今日のばん馬生産につながる「重種馬の十勝」の地位を決定付けたのです。

※産駒（さんく）/競馬用語で、ある父馬または母馬から生まれた馬のこと。

銅像になったイレネー

イレネーは怪我のため、20歳で命を落とします。その2年後の昭和5年8月、十勝畜産組合によって十勝公会堂前（現・帯広市西5条南8丁目）にイレネーの銅像が建立されました。全国でも種馬の像は例がなく、除幕式には来賓800人、観衆2,000人余りが詰めかけました。

この像は、第2次世界大戦中の昭和18年、金属供出によって接収されてしまいましたが、昭和39年に2代目の像が誕生。それが、現在も帯広競馬場入口に立つイレネー像です。

また、昭和44年には、その年デビューした新馬が競う重賞レース「イレネー記念」が創設され、毎年3月に開催されています。イレネーの名は今尚、十勝の地に深く刻み込まれ、人々の記憶の中に息付いているのです。



帯広競馬場入口に立つ現在のイレネー像。彫刻家・加藤顕清（かとうけんせい）作。

# 軍馬たちの受難の時代

明治後期に始まった国の政策で、馬たちは「生きた兵器」として戦場へ。十勝からも多くの馬が出征し、悲しい末路を辿りました。

## 軍馬の里になった十勝

### 国を挙げて大型馬を生産

大きな馬が珍重されるようになったのは、農耕のためだけではありませんでした。明治の幕開けとともに世界の荒波の中を泳ぎ出した日本は、諸外国との力の差を知らされることとなります。そのひとつが「生きた兵器」である軍馬の資質の違いでした。

縦横無尽に戦地を駆ける騎兵隊や、重い大砲をもとせずによく大型馬。よく調教され体格のいい西洋の馬に比べ、日本の馬はあまりに見劣りしていました。去勢もされていなかったため、発情期になると手がつけられなくなる始末でした。明治三十三年に中国で北清事変が起きると、日本軍も欧米の連合軍の一員に加わりまし

が、この時、連合軍の兵士は「日本軍は、馬のような形をした猛獣を連れてきている」という言葉を残しています。

さらに明治三十七年には日露戦争が勃発。ロシアが誇るコサック騎兵を目の当たりにした日本は、それ以降、国を挙げて軍馬の改良と生産を進めることとなります。明治三十九年、第一次馬政計画が始まると、国は全国八カ所に軍馬補充部を設置。北海道では上川、釧路、根室、そして十勝に支部が開かれました。十勝支部が置かれたのは現在の本別町仙美里を中心とした約二万ヘクタールもの広大な地。明治四十三年に釧路支部足寄太出張所として開かれ、十勝支部に昇格したのは大正十四年のことでした。



民間の馬も「お国のために」と戦場へ。愛馬との別れを惜しんで撮影した同様の記念写真が各地に残る。



仙美里駅から軍馬を送り出した経験をもつ森弘さん。手にしているのは、馬たちのひづめの跡が生々しく残る馬踏板。(写真/いずれも本別町歴史民俗資料館提供)

### 仙美里駅は戦場の入口に

軍馬補充部の任務は軍馬の購買、育成、補充でした。昭和十二年に日中戦争が始まると、軍馬の需要は一気に高まります。軍馬補充部には、馬市で「軍馬御用！」の掛け声とともにせり落とされた二歳馬たちが集められて来ました。馬たちはここで五歳まで育てられ、軍の即戦力となるように調教された後、各部隊へと送られて行ったのです。

十勝支部の馬たちは、今は廃線となった旧国鉄仙美里駅から貨物列車に乗せられ、九州の港を経て大陸へと渡って行きました。旧国

鉄職員の森弘さん（故人）によれば、勤のいい馬たちはホームと貨車の間に渡した馬踏板ばふみいたの上で足を踏ん張り、いななきを上げて乗るのを嫌がったと言います。

出征したのは軍馬補充部の馬だけではありませんでした。戦争が激化するにつれて、農家の馬も軍馬として買い上げられるようになりました。当時、馬一頭の値段は五十〜六十円でしたが、軍馬として買い上げられると、二百五十〜三百円もの高値がついたのです。お国のため、戦時中の苦しい暮らしを支えるためにと、農家の人々は泣く泣く愛馬を手放したのです。

馬たちは「武運長久」「一死報国」と書かれたたすきや日の丸の旗を掛けられ、神社で祈願を行った後、家族や地域の人々に見送られて出征して行きました。こうして「生きた兵器」として戦地に送り出された馬は、全国で七十万頭から百万頭に上りました。高額で買い上げられた軍馬は兵士よりも大切に扱われていたのが、過酷な戦場で待ち受けていたのは、悲惨な最期でした。戦地から無事に戻った馬は、ほとんどいなかったと伝えられています。



出征を前にして本別神社に集う軍馬たち。

馬術の天才、自ら軍馬育成を指導

昭和七年のロサンゼルス・オリンピックで愛馬ウラヌスを駆り、馬術大障害飛越競技で金メダルを獲得した「バロン西」こと西竹一。男爵（バロン）の称号を持ち陸軍の騎兵将校だった西は、昭和十四年から一年余り、軍馬補充部十勝支部に配属されていました。華族であり金メダリストでもある国民的英雄を迎えるに当たり、十勝支部は急ぎよ、西専用の官舎



軍馬補充部十勝支部の専用官舎前に立つバロン西。(写真/本別町歴史民俗資料館提供)



ウラヌスのたてがみ。

や乗馬練習場を用意しました。専任のコックや馬丁を従え、特注の軍服とエルメスのブーツに身を固めた西は、ダンディーな身なりとは裏腹に気さくで豪放な性格。育成中の馬が熊に襲われた時には熊狩りの先頭に立ち、射止めた熊とともに収まった写真を家族に送っています。馬を知り尽くしていた西の任務は、馬の育成指導でした。生産者には、愛馬精神を持って飼育に当たるよう呼びかけ、農閑期における馬の管理、とりわけ栄養状態と

ひづめの保護に注意を促したそうです。昭和二十年、西は硫黄島の戦いで戦死。東京世田谷の馬事公苑で余生を過ごしていた愛馬ウラヌスも、一週間後、まるで西の後を追うように息を引き取りました。西が肌身離さず持っていたウラヌスのたてがみは、現在、本別町歴史民俗資料館に収められています。これは、戦地からアメリカに持ち帰られた戦争遺品のひとつとして、後年、米側から返還され、遺族を通じて西ゆかりの本別町に寄贈されたものです。

本別町歴史民俗資料館

本別町の歴史を伝える同資料館の一角には、全国でも珍しい戦没軍馬遺産コーナーが設けられています。軍馬補充部十勝支部にまつわる資料やバロン西の遺品、出征する軍馬の写真、「馬は兵器だ」と書かれた馬政局のポスターなどが集められ、生きた兵器として戦場に散った無数の馬たちの悲しい歴史を今に伝えています。



住所：本別町北2丁目 電話：0156-22-2141  
開館時間：9時～17時（土曜～15時）  
休館日：日・月曜、祝日、年末年始  
\*開館時間や休館日は企画展などにより変更あり。

人に尽くした馬たちの冥福を祈る

今尚、親しみを込めて信仰される「馬頭さん」

路傍にひっそりと立つ馬頭観音（馬頭観世音菩薩）、通称「馬頭さん」。三面の顔と八本の腕を持ち、頭の上に馬の顔を載せたこの像、元は仏教の信仰対象のひとつであり、怒りの形相で諸悪を粉碎する菩薩とされています。それが、日本では江戸時代以降、人のために尽くした馬たちの霊を弔う民間信仰となって広まりました。

開拓時代から馬が家族同様に大切にされてきた十勝には、約五百体もの馬頭観音があり、その数は北海道内で最も多いと言われています。農耕馬の安全祈願のため、命を落とした馬の霊を慰めるため、あるいは戦地に赴く馬の無事を祈るため、人々はさまざまな思いを込めて、供え物を捧げ、お参りしてきました。馬を飼う家がほとんどなくなった今でも馬頭観音は「馬頭さん」と呼ばれて親しまれ、農村部では毎年、地域の人々が集まり馬頭祭を開



道内には古くから馬頭観音にお参りする風習が伝わる。(写真/荘田喜興志)



帯広競馬場の馬頭観音前で催される「愛馬感謝の集い」。(写真/NPO法人とかち馬文化を支える会)

く習わしが受け継がれています。帯広競馬場のきゆう舎地区にも、幾つもの観音像を納めた馬頭観音堂が設けられています。毎年八月のお盆前後には「愛馬感謝の集い」（NPO法人とかち馬文化を支える会主催）が開かれ、関係者が、これまでばんえいに貢献してきた馬たちへの感謝の念を新たにしています。

軍馬の魂を弔う慰霊碑

一方、軍馬補充部十勝支部が置かれた本別町の美里別にあるのが軍馬慰霊碑。同碑は前述の元

国鉄職員・森弘さんが、終戦後、仙美里駅でひづめの跡がついた馬踏板を見つけたのを機に、昭和六十三年に私財を投じて建立したものです。嫌がる馬たちを貨車に乗せて戦場に送り出す作業を担った森さんは、異国の地に散った軍馬の魂が、ふるさとの地で安らかに永眠することを願って、この碑を建てました。馬たちの無念を伝える馬踏板を祀ったこの碑は、馬たちの犠牲を後世に伝えると同時に、守るべき平和の大切さも訴えかけています。



美里別の家畜共進会場の横にひっそりと立つ軍馬慰霊碑。(写真/本別町歴史民俗資料館提供)

# 戦後の復興も馬たちとともに

馬なしでは成し得なかった戦後の復興。  
十勝では昭和四十年代頃まで、馬たちがあらゆる  
場面で人々の暮らしを支えていました。

## 十勝の経済を担った馬たち

### 山で、畑で、苦業とともに

昭和二十年の敗戦とともに、  
軍馬の時代は終わりを告げます。  
戦後の混乱の中で人々を支えた  
のは、やはり馬でした。

戦後の農地改革によって地主  
制度が崩壊すると、農民は自らの  
耕地を持てるようになりました。  
土地を得た農民たちが真っ先に

したのは、馬小屋を建てること。  
農業の復興のため、輸送や移動  
のため、馬は欠くことのできな  
い存在でした。

プラウを使った馬耕では大き  
く土を起すために二頭びぎで  
作業を行いましたし、馬の病気  
や出産に備え、換え馬も必要で  
した。そのため、どの農家でも  
三〜四頭の馬が飼われていまし

た。春になると子馬が生まれま  
す。この子馬を売れば、農家の  
生計の足しにもなりました。

農村の婚礼は農閑期に行われ  
るのが通例だったので、冬の花  
嫁は馬そりに乗ってやってきま  
した。村に産婆さんを連れてく  
るのも、病人を運ぶのも馬。暮  
らしのあらゆる場面に馬の姿が  
ありました。

農村だけではありません。漁業  
では、漁船を浜に上げたり、定  
置網を巻き上げるのに馬力を利  
用していました。林業の現場で  
は、山から狭い林道を伝って材  
木を運び出すのが馬の仕事でし  
た。厳寒の冬も黙々と働く馬た  
ちは貴重な労働力であると同  
時に、大切な家族でもありました。

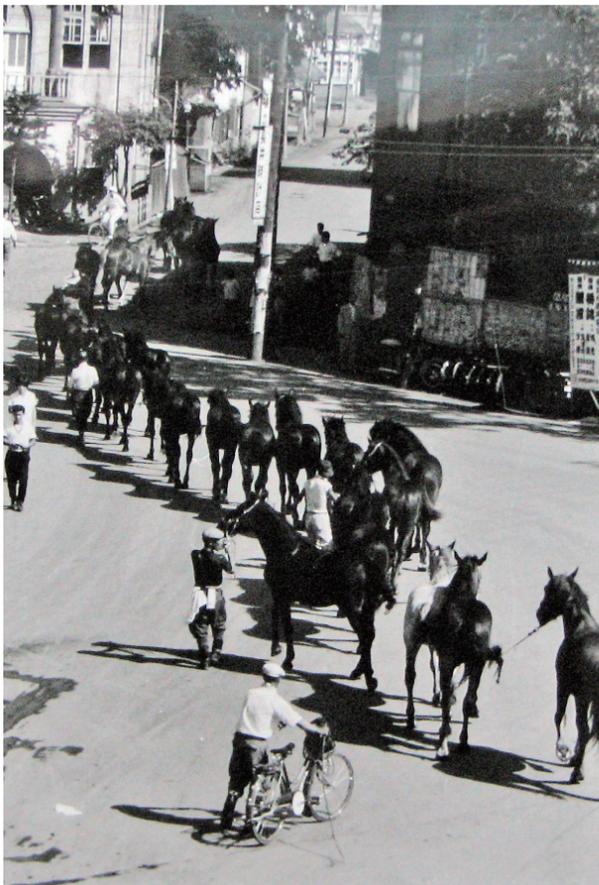
### 市街地を闊歩した馬たち

昭和三十年代、帯広の市街地に  
は数多くの馬車や馬そりの姿が  
ありました。運送業者の動力も、  
まだ馬が主役だった時代。駅に着  
いた荷物や、家庭から出たゴミ、  
し尿を運ぶのは馬たちの役目。バ  
スや乗用車の脇を、大きな荷物を  
載せた荷馬車が走る光景は、帯広  
市民にとって見慣れた日常風景  
でした。

当時の帯広の風物詩とも言える  
のが「馬ふん風」。冬の間に馬た



昭和33年、帯広市西5条南10丁目の踏切を渡る馬車。



売られていく2歳馬。左上の建物は川上外科、右上は帯広駅前にあった北海道ホテルの前身。



帯広市西2条通り10丁目あたりを横切る石炭馬車。(写真/いづれも荘田喜與志)



馬そりに乗った花嫁。昭和33年、清水にて。



昭和31年、薪を積んだ荷馬車が帯広の駅前を行く。

ちが雪道に落とした馬ふんは雪の  
下で凍り、春の雪解けとともに地  
表に現れます。これが細かなチリ  
となり、春の乾燥した風に乗って  
飛散したのが馬ふん風です。衛生  
上の問題が指摘され市民から苦情  
が出たために、馬のお尻の下に袋  
が吊るされるようになり、以来、  
道を汚すことはなくなりました。

馬がいて当たり前だったこの時  
代、馬に関わるさまざまな商売が  
成り立っていました。働く馬にな  
くてはならない蹄鉄屋、荷馬車の  
製造や修理を担う馬車屋、馬具を

扱う馬具商などほどの町にもあ  
り、馬耕用農機具の製造・販売業  
も盛業でした。また、帯広市内  
には何軒もの馬宿があり、馬市が  
開かれると、馬を連れてやってく  
る人々や家畜商たちが賑わいまし  
た。売買が成立した馬は、帯広駅  
から貨車に積み込まれ、本州各地  
へと送られていきました。

馬が十勝の経済の一翼を担って  
いた。そんな時代があったのです。



寒さ厳しい陸別の冬山で、材木を運び出す馬そり。



プラウを使った馬耕が行われていた昭和31年の光景。

## 神田日勝が描いた十勝の馬

### 疎開者として東京から鹿追へ

十勝の馬文化を語る時、すぐに思い浮かぶ絵があります。画家・神田日勝の描く幾頭もの馬たちです。初期の作品「瘦馬」に始まり、絶筆「馬」まで、日勝は十勝の開拓と農耕を支えた馬の姿を描き続けました。



青年時代の神田日勝、若と。

日勝は昭和十二年、東京の練馬に生まれました。昭和二十年、両親が東京空襲の被災者のために組織された「拓北農兵隊」に応募。当時八歳の少年だった日勝が家族とともに鹿追に入植したのは、皮肉にも終戦の前日、八月十四日のことでした。

北海道開拓という明治期を思い出しがちですが、未開地の開墾は昭和期になっても尚、続いていました。戦中戦後、本州で被災し家を失った人々が、北海道に新天地を求めて続々とやってきました



数ある日勝作品の中でも、見る者の心に迫る傑作「馬（絶筆・未完）」。1970年。（神田日勝記念美術館蔵）。

が、馬を買うお金もなく、ほとんど素手で荒地と格闘する日々。慣れない力仕事と貧しい暮らしに耐えかね多くの人が脱落していききました。そんな中、神田一家は開拓の厳しさと向き合い、この地に根を下ろしたのです。

### 馬の絵に託された思い

中学を卒業後、日勝は営農の担い手として働き、その傍ら、絵を描き始めます。ベニヤ板にペインティングナイフで描く独特の画風から生み出された馬の姿。そこには、ともに土と苦悩する大切な家族に注がれた日勝の慈しみの眼

差しが感じ取れます。代表作「死馬」では、克明に描かれた体毛の一本一本から、湿った汗の匂いがいまだに立ち上っているかのようです。

十勝を代表する画家としての評価が高まり、これから期待された昭和四十五年、日勝は腎盂炎による敗血症を併発し、三十二歳という若さで亡くなりました。この時、彼が最後に描こうとしていたのも馬でした。前半身だけが描かれた「馬（絶筆・未完）」。描かれなかった空白の部分埋めるのは、馬とともに生きた十勝人の馬に寄せる心情に他ならないのかもしれない。

## 神田日勝記念美術館

神田日勝ゆかりの鹿追の地に、平成5年に開館。農民であり画家であった日勝の代表作と素描・遺品などを展示している。館内には無料音声解説ガイドの貸出もあり、同館の概要や神田日勝の生涯について聴くことができる。



住所／鹿追町東町3-2 電話／0156-66-1555  
開館時間／10時～17時  
休館日／月曜、祝日の翌日、年末年始

## 馬力から、トラクターの時代へ

### 急速に姿を消していった馬たち

昭和三十年代後半になると、十勝にも機械化の波が押し寄せます。農作業の動力は馬力からトラクターへ。長年、馬と苦勞をともにしてきた農家の人々も時代の波には逆らえず、次々と馬を手放してトラクターに切り替えていきました。

街中を走る荷馬車も急速に減っていきました。雪深い冬には馬そりによる輸送が活躍する余

地がまだ残されていましたが、それもやがてトラックに取って代わるようになります。仕事を失った馬たちは見る間に姿を消していきました。

昭和三十年には約六万五千頭いた十勝の馬たちは、それをピークに、昭和四十年代後半にはついに一万頭を切るまでに減少します。これまで馬を育てていた牧場の多くが、馬に代わって牛を飼うようになりまし。これこそが、その後の「酪農王国・十勝」の序章へとつながっていったのです。



昭和57年に音更町十勝温泉郷に建立された「十勝馬唄」の歌碑。

### ばんえい競馬に継承される馬文化

十勝の開拓が始まってから高度成長期までの約百年、何をしても馬なしでは暮らせない日々がありました。馬とともにあった時代を知る人は、今尚、馬への特別な思いと感謝の念を忘れていません。十勝を代表する民謡として知られる「十勝馬唄」も、馬たちがいた十勝の原風景を偲んで、昭和

四十一年に発表されたものです。懸命に農具や荷車をひき、人のために尽くした馬たち。その昔日の姿を、唯一今に伝えるのが、ばんえい競馬です。戦後間もない昭和二十一年に公営競馬となつて以来、七十年にわたって継承されてきたばんえい競馬は、現在では十勝帯広でしか見ることのできない北海道遺産として守り継がれています。

## トラクターの時代を描いた絵本『赤べえ』



十勝のとある農家で長い間、農耕馬として家族と苦勞をともにしてきた「赤べえ」。近所の農家が次々トラクターを買うようになって赤べえを手放すまいとしていた一家ですが、ついにつらい決断を下すことに。農家の少年・勇作の目を通して愛馬との別れを描いた絵本『赤べえ』。ここに描かれた光景は昭和30年代から40年代にかけて、北海道はもとより日本各地で見られていたものです。本書は全道の小学校に配本され、馬が暮らしの中だった時代を後世に伝えています。

\* 原案は米水道裕さんの演劇脚本「斑馬の嘶き」、作者はエッセイストの旋丸 巴さん（現在NPO法人とかち馬文化を支える会専務理事）、挿絵はばんえい競馬初の女性調教師でもある谷歩（あゆみ）さん。平成16年、十勝馬事振興会、十勝農業協同組合連合会、北海道鞍用馬振興対策協議会発行。

# 継承され続ける馬文化

十勝では今も、草ばん馬、馬追い、流鏑馬（やぶさめ）など、馬文化を継承する行事が各所で催されています。

## ばんえいの原点、草ばん馬 「鹿追町競ばん馬競技大会」

ばんえい競馬のルーツとなったのは、農民たちが自慢の農耕馬を競わせた「草ばん馬」。神社や地域のお祭りで開催されたことから「祭典ばん馬」とも呼ばれ、今も北海道・東北各地で盛んに行われています。

十勝で祭典ばん馬として古い記録があるのは、明治四十一年に始まったとされる音更町東土幌神社の祭典余興。このほか上土幌、土幌、浦幌、本別、足寄、池田の各町でも開かれています。現在、鹿追町のみで存続しています。それが毎年夏に鹿追町ライディングパークで開催される「鹿追町競ばん馬競技大会」です。同大会には道内各地から集まった精鋭たちに加え、帯広競馬場のばん馬も出場。昔ながらのU字コースで砂塵を舞い上げながら白熱のレースを繰り広げ、詰め



一斉にU字コーナーに飛び込む人馬。(写真は平成27年、第54回大会の様子)

かけた地元の家族連れや、ばん馬ファンを沸かせます。大人たちが交じって、少年ジョッキーが果敢に馬を追う姿が見られるのも、草ばん馬の面白さ。かつて草ばん馬がプロ騎手の登竜門だったように、ここから明日のジョッキーが誕生するかもしれません。このほか、ポニーばん馬レース、速歩競走、駈歩競走、さらに全国でも珍しい二輪馬車をひく繋駕速歩競走なども行われています。

## 今や、冬の十勝の風物詩 十勝牧場の「馬追い運動」

音更町の（独）家畜改良センター十勝牧場では、毎年一・二月の厳寒期に「馬追い運動」が行われます。冬の運動不足解消と妊娠馬の難産防止のため、百頭を超える重種馬たちが走路を疾走。中でも大きなお腹を抱えた妊娠馬が一团となって雪を蹴散らしながら走る姿は壮観です。近年は口コミで大勢の見学客が訪れるようになり、十勝の冬の風物詩として、全国的な注目を集めています。



雪けむりをあげて駆け抜ける馬たち。

## ドサンコ流鏑馬で豊作祈願 「帯廣神社流鏑馬奉納」

帯廣神社の秋季例大祭では、五穀豊穡や無病息災を祈願して、ドサンコによる流鏑馬が奉納されます。これは平成二十二年に帯廣神社鎮座百周年を記念して始められたもので、十勝どさんこ弓馬会が主催。十勝内外から射手を集めて行われます。

鎌倉時代の上級武士の装束をまとった射手たちは、走る馬上から的を射抜き、人馬一体の技を披露。古式ゆかしい行事に、境内は肃々とした空気に包まれます。



帯廣神社境内の特設馬場で行われるドサンコ流鏑馬。

## 帯広競馬場に若駒が結集 「全道祭典ばんば1才馬決勝大会」

年に一度、北海道内の各地区から選抜された1才馬が、帯広競馬場に結集。北海道鞍用馬振興対策協議会の主催による「全道祭典ばんば1才馬決勝大会」が開かれます。その重量は、牡350キロ、牝330キロ。本レースと同じ200メートルの本走路を使って、全道一を競います。

平成27年度は11月7・8日に開催。優勝馬の予想大会も実施され、的中者には抽選で景品が贈られました。



ばんえい競走馬の卵たちが、帯広競馬場で競い合う。



お弁当を広げながら間近でレースを楽しめるのは、草ばん馬ならではの。



ポニーばん馬レースでは、ポニーとは思えない迫力に観客も大興奮。